



# 文献センター通信

第 42 号

2018年5月1日  
一部 100 円

## 戸田三三冬さん逝去さる

### マラテスタ研究、アナキスト・クラブでの活動も

去る一月十一日、戸田三三冬さんがくも膜下出血により永眠されました。二〇〇八年に脑梗塞を再発、以降リハビリに努めておられましたが、再びあの活気あふれる姿を拝見できなくなつたことは誠に残念なことです。謹んでご冥福をお祈りいたします。なお、葬儀はご遺族の意思により一月十四、十五日に密葬で執り行われました。

三三冬さんの経歴は、現在改訂版が編集作業中の『日本アナキズム運動人名事典』のために田中ひかるさん、櫻田和也さん、松本勲さんらによつてまとめられた一文から掲載します。

文献センターとの関わりを報告しておきますと、二〇〇六〇八年にかけての二年ほど三三冬さんが保管してい

たアナキスト・クラブの資料・布留川信さんの蔵書を整理し、寄贈を受けました。寄贈内容に関しては二〇一一年に同日録が作成されています。ただ布留川信蔵書には原稿・書簡などのペーパー資料は含まれておらず、没後に処分されたようでした。



戸田さんの自宅でアナキスト・クラブの蔵書整理。2007年6月。

#### 主な内容

- 戸田三三冬さん逝去さる……………1
- アナキーな幸せ(抄) 戸田三三冬……………3
- 文献センター八街書庫訪問記……………4
- 国内ニュース(現場からの報告)……………5
- 海外ニュース「バルカン半島デモ」……………6
- 古本屋オヤジの旧書紹介……………10

### とだみさと 戸田三三冬【略歴】

一九三三年十二月二十五日 - 二〇一八年一月十一日

歴史家。マラテスタ研究者。文政大  
学教授。

一九六〇年、日本女子大学文学部史学科卒業後、東京大学大学院社会学研究科国際関係論大学院入学。博士課程進学後、フルブライト奨学生として米  
国ボストン大学大学院史学部博士課程に留学。ポーランドのナシヨナリズムに関する論文を提出。帰国後、六九年

六月から三カ月間、ヨーロッパ諸国をまわり、シベリア鉄道を経て帰国。七一年四月二十八日の日比谷公園での大集会で、背叛社事件の被告だった信太裕と出会い、翌日の高田馬場での一集会で大島英三郎からマラテスタのパンフレット『農民の中へ』(戦前の木下茂沢『農民に伍して』の復刻版)を譲

#### 【当面の刊行体制】

前号で本通信の隔月刊化を報告しました。その後の話し合いで隔月刊のための新体制を確立すべく(今号はその第一号ですが)、当面(年内)は従来どおりの季刊ペースで助走し、来年から隔月刊行を目指すことにしています。現行のB5判・タテ組み・八頁を基本としている体裁をどうするかが大きな課題の一つです。ご意見ご感想をお寄せください!  
(編集委員会)

られる。イタリアのアナキストの機関紙リヴィスタ・アナルキカ(“A”誌)に寄せた手記によると、「父の兄弟がアナキストだったと幼少よりきかされていたことを思い出して」、翌日、日本アナキストクラブの例会に信太裕らとともに参加。

当時クラブは月一回程の例会をメンバー宅にて持ち回り制で開催。開催通知はがきにあるメンバーリストには以下のメンバーの自宅の住所が記載されていた。綿引邦農夫、布留川信、女屋勘左衛門、上野延代、安達幸吉、島津一郎(水沼浩?)、信太裕、戸田三三冬。アナキストクラブには厳密な構成員の

位置づけはなかったが、常時参加して自宅を例会に提供しているのが実質的なメンバーだった。戸田はクラブで「毎月日曜の昼下がり家族のように語らいう時間ですごした」と回想。布留川信との親交は深く、没後の資料整理に尽力。クラブと布留川信の資料を引き継ぎ、それらは二〇一〇年に文献センターに収められた。

また、『農民に伍して』にあるマラテスタの「身体を貫くような」言葉に魅せられイタリア語を学び始め、七三年に結婚した三宅立の在外研究にともない、ドイツ・イタリアに留学。ベルガモにあったマシーニの「マックス・ネットラウ図書館」を訪問。ピエル・カルロ・マジニ館長の紹介で、バクーニン没後百年を記念したヴェネツィアの国際



1997年のワルグアイ訪問時

会議でバクーニンとメーチニコフの日本滞在記録について話す。以来イタリア人同志との

出会いを通じて、マラテスタが決して去の人ではないことを知る。渡欧中の一九七六年に最初のマラテスタに関する研究論文「南欧からの手紙」を日本語で発表。帰国後、日本女子大学・立教大学などで非常勤講師として西洋史や国際関係論などの講義を担当。

八〇年頃に開催されたスペイン革命についての集会を契機としてマラテスタ研究会を何度も主宰。八二年から、イタリア外務省の文化交流基金による助成をえてナポリ大学附属リソルジメント現代史研究所の研究員としてアルフォンソ・シロッコ教授のもとで在外研究。「八七〇年頃のナポリ時代マツィーニの共和主義学生運動に属していたマラテスタは、いかにしてパリ・コミューンから第一インター支部の社会主義者に転じたか？」という問いをテーマとして、国立文書館の地下書庫から官憲史料に至るまで丹念に紐解く日々を過ごす。その成果がイタリア語の名著『エッリーコ・マラテスタ―マツィーニからバクーニンまで』。マラテスタの前半生に関する基本文献として今日まで参照され続けている。

八二年以降、「A」誌でマラテスタに関わる記事や手紙などを寄稿。同年

九月ミラノで開催されたマラテスタ没後五十年祭で報告。九二年十二月にモスクワで開催されたクロボトキン生誕150周年記念学術会議で報告。九〇年から文教大学国際学部教授。

九七年にはサバティカルでカミッコ・ベルネリの足跡を訪ねてスペインを訪問したのちマラテスタを父のように慕った盟友ルイージ・ファップリの娘ルーチエ・ファップリ(当時九十歳)をウルグアイに訪ね、同地で共同体を運営する若き同志たちと交流した後、アルゼンチンでマラテスタの亡命時代を



2002年、バルセロナ訪問時、マネル・アイサと (https://manelaia.com/articulo/el-aep-en-le-monde-liberaire/ から転載)

調査。二〇〇四年に退職後、マラテスタ研究に取り組む。〇五年、脑梗塞で倒れ、〇八年に再発。その後リハビリに努めていたが一八年一月十一日死去。享年八十四。

「マラテスタの娘」を自称していたとも言われている。イタリア人の同志には最も知られた戦後東洋人アナキスト研究者であったかもしれない。また、イタリアのアナキスト組織では日本のマラテスタ研究者として著名であった。

主な著作に、アーダ・ゴベッティ著(戸田三三冬監修・解説、堤康徳訳)『パルチザン日記 1943—1945 イタリア反ファシズムを生きた女性』(平凡社、1995)、『平和の方法としてのアナキズム』『国家を超える視角—次世代の平和』(法律文化社、1997年)、『アナーキーな幸せ』コリーヌ・ブレ編著『人間アナーキー』(モジカンパニー、2002)、『マラテスタ研究をめぐる史料状況 素描(1871—1891)』『文教大学国際学部紀要』第15巻第1号(2004)、戸田三三冬・藤巻光浩編著『グローバルゼーション・スタディーズ(入門編) 国際学の視座』(創成社、2005)などがある。

(松本勲・櫻田和也・田中ひかる)

## アナーキーな幸せ (抄)

コリーヌ・ブレ編著『人間アナーキー』(モジカンパニー/2002)  
より一部転載

戸田三三冬

「相互扶助」というのは、クロボトキが言って世界中に広まり、とても有名な言葉になったのだけれど、彼の学問的な裏付けも大切ですが、もともと人間の生活の中にあるものだし、アナーキストの中では当たり前のことだったのね。生態系の破壊が意識化されている今、エコロジストの間でクロボトキが大変見直されています。

アナーキズムというのは、今言ったような全体の考え方、生き方をどうやって実践するか、というための方法なんです。例えばあなたが「いいなあ、私の生活の中で少しはできるかしら」と思っ

て工夫をする、それはもうあなたのアナーキズム。アナーキズムは学者が理論をつくるものではなく、基本は、みんながしあわせや自由を感じる、感じ合える、そんな人間のグループをどうやってつくったらいいか、という一人ひとりの実践の方法なんです。

アナーキズムにとってしあわせというのは、いつも自分だけのしあわせではなく、一緒にいる人、一緒に住む人もしあわせじゃないと、しあわせでないわけです。自由と同じです。自分だけ自由というのはないでしょ。相手に自由を与えようという決意なしには自分の自由はないし、渡された自由を本当に自分で実践しようと思ったら、自分の周りの人にどれだけ自由を許せるか、そういう「関係性」の中にしか自由はないですから。

「しあわせ」もまったく同じで、自分がしあわせと感ずることだけではフワフワした空気がみたくなものだから、やはり具体的な生活の中で、自分がしあわせというのを自分と自分の周りの人間の中で実現するというのか。そのようにしてしかアナーキズムの中の「しあわせ」はないと思っんです。

マラテスタが言っているのね。人間は生まれたときから社会の中に生まれ

いてお父さんがいる。そういう人間の集団の中に生まれるというのは逃られないことで、選択できないこと。そういう集団をどういう集団にするか、があなたの課題なんだと。逃れられないから、その状況は受け入れるしかない、受け入れたときにその中で自分がどのように生きていくかということ、自分だけじゃなくて自分が一緒に暮らしている人たちが、遠くや近くに暮らしている人たちとどういう関係を

マラテスタは、ひと言で言えば、愛をすべてのものの上に置いた人です。愛って堅い言葉だけれど、イタリア語でアモーレ。連帯と言ってもいい。ブルドンが言ったのは、自由と平等すなわち正義であると。マラテスタは、正義ということを言うと、一人ひとりが自分が正しいと思うから争いになる。正義というのはバランスをとろうとする行為で、その象徴は秤(はかり)だけれど、愛というのはもつとあげたいなあ、もつともつとあげたいなあ、という気持ちなんだ。僕はアナーキーの究極は愛だと思う、と言っんです。自分のできることをして、必要なものもらうというのが愛のアナーキズムだと思っんです。

\*全文は文献センターウェブサイトに公開します。(http://cira-japan.net)

### 追悼文を募集します

生前に戸田三三冬さんと交流のあった方、追悼文をお寄せください。次号で特集を組みたいと考えています。

原稿枚数四〇〇字で一〜三・五枚。×切六月一日、送付先・奥付参照(郵送またはメールでお送りください)

# 文献センター八街書庫訪問記

手塚登士雄

大詰めを迎えた「日本アナキズム運

動人名事典」増補改訂版の編集会議で昨年になって付録の機関紙誌一覧に一九四五年以降の機関紙誌も追加することになり、現在「やちまた」(千葉県八街市)に保管されている機関紙誌を確認する必要が出てきました。八月のある日、これも「ばる出版」で進められている「大杉栄資料集」編集会議で、度々話題となる「やちまた」を一度訪ねてみようということになり、十月一日(土)、奥沢、白仁、富板、手塚の四人が同道しました。

十四日は朝から小雨が降っていましたが、私が軽自動車を用意し、大泉学園駅前で白仁さんに乗せ、西荻窪駅近くで奥沢さんと富板さんと合流、八時半ころ八街に向け出発しました。環八高井戸入口から首都高に入り、湾岸線から東関東自動車道、京葉道路、千葉東金道路へと進み「山田IC」で高速道路を下りました。北へしばらく進むと目的地付近に到着。所要時間はおよそ一時間半でした。



道路沿いにある「ファーストカーゴ千葉」(二段写真)という何台もの大型トラックを擁する会社の左側の細い並木道に入りトラックセンターの裏側を右に曲がると大きな倉庫がありました(二段写真)。ここが資料を集め、整理、保存している場所です。倉庫の先に平屋建ての民家があります(最下段写真)。敷地は千坪ほどあり畑作もできます。倉庫に入ると右側に背の高い書架が



並び、壁際には雑誌や機関誌が入った箱が積み、入口の左側には幾つかのテーブルと椅子があります。白仁さんが淹れて来てくださったコーヒーで一服すると各自仕事を始めました。奥沢さんは月一、二回訪問して進めている資料整理に取りかかり、富板さんは白仁さんの紹介を受けながら機関紙を取めたファイルを繰って調査を進めます。私は書架の端から眺めていき、こんな本があったのか、などと感心するばかりでした。



休憩。午後も作業を継続、また奥沢さんの買い出しに車で近くのスーパー兼ドラッグストアに行きました。富板さんは戦後の機関紙誌に関して幾つもの課題を解決できたとのこと、日暮れ前に出発しようと泊まりがけで作業をする奥沢さんを残して三人は帰路につきました。

八街市は千葉市の東側にあり、少し足を伸ばせば房総九十九里浜で太平洋を眺めることができます。定期的に誘い合って訪問し、各自の調査、研究資料整理を進めるとともに九十九里浜などに遊ぶのもいいかなと思いました。

## 国内ニュース

## 〈現場からの報告1〉

移住労働者が声をあげる  
「マーチ・イン・マーチ」が  
開催

現在、国内で就労する移住労働者（外国人労働者）は一二八万人にのぼると言われています。私たちの身近でもコンビニ、飲食店、工事現場など様々なところで移住労働者を見かけることが多くなりました。もはやこの国の経済は移住労働者ぬきには成り立たないの



です。

しかしながら、残念なことに彼・彼女らの多くは日本人労働者よりもはるかに劣悪な労働環境のもとで酷使されています。社会保険や雇用保険に加入させてもらえなかったり、給料未払や労災かくし、不当解雇などがまかり通って移住労働者を苦しめています。

そこで、移住労働者の生活と権利の向上を求めため、二〇〇五年から「マーチ・イン・マーチ」というイベントが移住労働者を組織する労働組合や支援団体などにより毎年三月に行われるようになりました。MARCH（三月）のMARCH（行進）というわけです。

今年は三月四日の日曜日、前半は上野水上音楽堂でビルマ（ミャンマー）やタイの伝統舞踊、フィリピンの民族音楽等々、国際色あふれる出し物で盛り上がり、後半はブラジルのサンバ隊を先頭に元気にデモ行進しました。

総勢二七〇名のデモ隊は「移住労働者への差別を許さないぞ!」「多民族多文化共生社会を作ろう!」とシュプレヒコールをあげ上野の街一帯を練り歩きました。次回は皆さんも是非ご参加ください。

（山口智之）

## 〈現場からの報告2〉

## 檜森孝雄さんを偲んで

三月三十日の「パレスチナ土地の日」は、檜森孝雄さんの命日でもあります。彼は二〇〇二年の同日夕刻に日比谷公園「かもめの広場」でイスラエルによるパレスチナ侵略に抗議し焼身自決しました。享年五十四歳。

一九七一年、京都パルチザンの一員としてアラブに向かった檜森さんはPFLPから軍事訓練を受け「リツダ闘争」を準備しましたが、諸事情があり七二年に帰国し現地に数名の戦士を送り出します。

一九七二年五月三十日に遂行された「リツダ闘争」直後に旅券法違反で逮捕。その後は非公然体制で武装闘争を志すも、八〇年代後半に公然化。以降

は自身が関係した日本赤軍メンバーの救援活動やイスラエル大使館への抗議行動に取り組みました。

九〇年代後半には思想を越境しアナキズム陣営に接近。当時、山口健二氏が発行していた雑誌『叛』や向井孝氏らの雑誌『黒』に貴重な手記を寄せてくれました。同時にアナキストたちとの人間的な信頼関係を構築しました。

しかしながら十八年前の「土地の日」、檜森さんは突然、自らの命を絶つたのです。信じられない出来事でした。

二〇一八年三月三十日午後五時。「かもめの広場」には二十名弱が集まりました。松田政男さんや足立正生さんを始め、「関係者」が殆どでしたが、興味が有り参加してみたという三十代の若者もいました。献杯の音頭は松田さん。車椅子から立ち上がり「おい、檜森。みんな来てるぞ。お前だけそっちに行っちゃって…。まあ、今日は飲もう。献杯!」

その後は仲間のジャズ演奏やマイクを回しての一口アピールとなりました。檜森さん。あなたは黒と赤の思想を超えて私たちの友人であり同志でした。改めて献杯!

（山口智之）



## 海外ニュース

## テッサロニキ（ギリシャ）での国際反ファシズム汎バルカン半島デモ

二〇一八年一月二一日、ギリシャのテッサロニキにあるスクウオット「リベルタティア」がナシヨナリストに襲撃を受け、放火された。この二階建ての建物は二〇〇八年に占拠され、当初は移民の社会センターとして使われ、その後様々なグループの社会センターとなり、現在はスクウオットとして使われている。襲撃は、隣国マケドニアの国名に反発するナシヨナリストの大規模デモの最中に行われた。ナシヨ



ナリストの大規模デモは二月四日にも行われた。

これに対し、アナキストや反権威主義のグループと組織が抗議行動を呼びかけ、三月十八日、テッサロニキで、ナシヨナリズム・資本・ファシズム・戦争に反対する汎バルカン半島デモが行われた。デモにはバルカン半島諸国の同志たちも参加した。

詳細は以下のサイトを参照（英文）  
<https://en.squat.net/tag/squat-iberlata/>  
<http://afed.org.uk/against-states-nationalism-and-war-huge-mobilisation->



in-greece-10-march-2018/

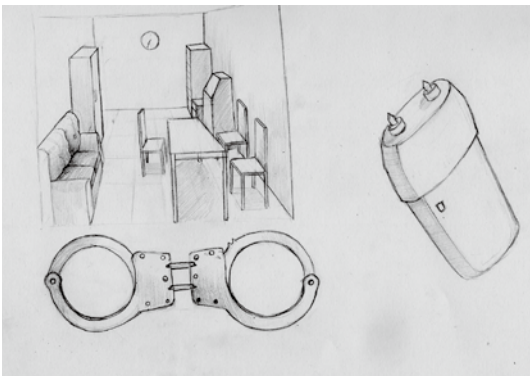
（翻訳・編集：森川莫人）

ロシア、アナキストの弾圧  
アナキスト黒十字（ABC）  
モスクワ支部の報告

ロシアではアナキストに対する弾圧が続いている。

今年に入っても弾圧は継続し、二〇一八年一月、ペンザで五人、サンクトペテルブルクで二人のアナキストや反ファシストが「テロリスト組織」に参加したという嫌疑で、ロシア連邦保安庁（FSB）に逮捕され、電気ショックなどで拷問を受けている。

モスクワでは、一月の終わりにプーチンの統一ロシア党事務所窓ガラスが何者かに割られ、放火された。犯行声明には「誰が大統領になろうとも、その政策は労働者の弾圧と搾取でしかない。我々はアナキストとして、大統領などの国家機構ではなく、自治と直接民主制を求める。戦いに参加せよ！」と書かれていた。警察は二月十三日に二人のアナキストが住むアパートを強制捜索し、二人を尋問した。解放された後、彼らは逃走し、行方をくらました。チェリヤビンスクでは、五人のアナ



キストが二月十九日に拘束された。ペンザで逮捕されたアナキストへの連帯行動をFSB地方支部近くで行っている最中、参加者の中に「FSBこそテロリスト」という断幕を掲げ、発煙弾を地方支部のフェンスから投げ込んだ人がいたためだった。拘束された五人はテーザー銃（スタンガンの一種で、肌突き刺して使う）で拷問され、断幕を掲げたことを認めるよう要求されたという。最終的に彼らは保釈されたが、国外に行くか引越すかしなければならぬ状態にある。

クリミアでは二月一日にアナキスト



が一人拘束された。ロシアのソーシャルメディア「フ コンタクト」にビデオを投稿し、「憎しみを煽り」「テロリズムを正当化」したという容疑だった。彼はまだ拘留中である。

詳細は以下のサイトを参照 (英文)  
<https://avtonom.org/en/news/review-repressions-against-anarchists-russia-2017-and-first-months-2018>

拘留中のアナキストを支援する方法も上記サイトに掲載されている。Pa y Pa i を使う場合の ABC モスクワのアドレスは、[abc-msk@riseup.net](mailto:abc-msk@riseup.net) である。なるべくユーロで寄付してほしいとのこと。(翻訳・編集：森川真人)

## チリ・サンチアゴの集会で日本のアナキズムなど紹介

チリ・サンチアゴで二月十七日「Desbordando Fronteras (国境を打ち倒す)」と題した集会が市内の公園で開催された。

「Biblioteca Denjro Kotoku y Suga Kanno (幸徳傳次郎・菅野スガ図書館)」による企画で、「ヨーロッパ中心主義とインターナショナルイズム」をテーマとしたデイスカッションや、日本のアナキズム運動についてのプレゼンテー

ションが行われ、文献センターが提供した日本のアナキズム関連の写真も会場の公園内に展示された。

参加者にはウィーガン (完全菜食) 料理もふるまわれ、音楽の演奏もあり、楽しく有意義な集まりになったとのこと。

「幸徳傳次郎・菅野スガ図書館」はその後も、未成年女性のための避妊ピルの使い方ワークショップの開催や、監獄制度に反対する女性たちの集会への出席など、精力的な活動を続けている。ウェブサイトはこちら。

<https://bibliotecakotokuykanno.wordpress.com>

(成田圭祐)

## 辻潤についての論文書籍化

エラーナ・ジェイ・テイラー (Erana Jae Taylor) による辻潤についての論文『Tsui Jun: Japanese Dadaist Anarchist, Philosopher, Monk』が自費出版で書籍化された。戦前のアナキズムやダダイズム、また萩原恭次郎、高橋新吉、金子文子、マヴォのメンバーなど、同時代を生きた人々にも言及しながら、辻潤の生涯や作品について詳しく論じられる。

ニヒリズム関連書籍に特化した「Underworld Amusements」やアナキストによる運営の「Little Black Car」などのオンライン書店、また北米各地のインフォショップ／アナキスト書店で販売されている。新宿イレギュラー・リズム・アサイラム (03-33352-6916 13時-20時※月水除く) にも近々入荷する予定。(成田圭祐)



## 連載 (14) 自由人の日本史 II

## 生活点からの決起

## 米騒動一〇〇年

## その1 アナキストの周辺

武智 忍

ルポライター、猪野健治さんとは、半世紀にわたる厚誼だ。

『日本アナキズム運動人名事典』(ぼる出版)では、おもに無頼派の項目を分担したが、私はさらに西日本の米騒動関係も引き受けていた。

事典が出てまもなくの頃、週刊誌に山口組大幹部のプロフィールが連載されていた。猪野さんの署名記事である。なかに一人の人物。

「猪野さん、あれ同一人ですよ、若いころ神戸の米騒動で捕まっています」事典の項目を示すと「ホントだ、彼だな」と、猪野さんは苦笑い。

少し長いが事典の文章を引く。

「社会主義者たちが傍観した米騒動で、群衆の先頭に立ったのは無名の庶民であった。

演説の方法もわからず、皆に押し出され、ミカン箱の上に乗って『諸君、諸君』と声をかけただけの(後の言葉

が続かなかった) 沖仲仕・坂出敬信も、事件後はその『諸君』を問われ、懲役八年に服した」

庶民の抵抗。少し骨っぽい人物の台頭——といっても、無名者の行動には、そんなベーススが付きまとう。

\*

全国で百万人が加わったとされる米騒動。

警察力では抑えきれず、軍隊が各地に出動。皇居を警備する近衛師団も市民に銃を向けた。

二万五千人以上が検挙され、死刑二人、無期懲役十二人を含む八千人あまりが重罪を課せられた。日本の近・現代史上、最大の大衆蜂起である。

六十年安保闘争や、七十年代の若者の反乱とは比べようもない。

そんな巨大なエネルギーを日本の大衆は持っていたのだ。今も、多分。

いや、秘めているのだ。今も、多分。

はじめは富山の主婦たちによる「米寄せ」の直接行動。当時の新聞の見出しは、米騒動でなく米一揆。ズバリ「女一揆」の見出しもある。

\*

全国に広がった激しい闘いのなかで、

組織的指導者とは無縁だった米騒動だが、例外的にこれに係わったアナキストは二人いる。

大杉榮と山鹿泰治である。

九州からの帰途、足を止めた大阪で、大杉はこれを目撃。いかにも彼らしくたちまち騒動に身を投じた。

大阪を代表するサンジカリスト逸見吉三さんは、この時十五歳。大杉に付いて、騒乱の街中を駆け回った一人である。

晩年の吉三さんについて、脚本家の笠原和夫は、著作の中で急進派グループの黒幕であるかのように描写しているが(『破壊の美学』幻冬舎)、吉三さんの実像はこれとは大違い。かつての和田久太郎との日々を楽しげに語り、若年の私たちには、いかに官憲の尾行をまくか、を熱くアドバイスする。



山鹿泰治、三〇歳のころ(CIRAカレンダより)

終生、変わることのないロマンチストだった。

大杉と大阪の米騒動については『墓標なきアナキスト像』(三一書房)があるからここでは省略する。

\*

一九一八年八月。富山から飛び火した米騒動は、東七条派出所への襲撃で京都市中に燃え広がった。

前年、京都に帰り、印刷店を営んでいた山鹿は、この時二六歳。

下京区一帯で群衆が米屋を襲撃しているの知らせを聞くと、いわば反射神経のバネで騒動の渦中に飛び込んだ。クールな山鹿を突き動かす、もう一つの本能である。

『京都地方労働運動史』によると、長沢青衣(確三郎)とはこの時に出会ったようである。(長沢はこの後、秘密出版事件で山鹿と共に検挙され、出所後は上京して望月桂の黒耀会に参加している)

警官に取り押さえられていた青年を山鹿らが力づくで奪い返した。

「この後、義兄弟となり、のちのち付き合うようになった」(たそがれ日記)とあるのは、長沢のことである。

〈続く〉



出版情報

今回は本の情報のみですが、次号以降は他のメディア情報も含めていく予定です。乞う御情報！ \*今号ではこれまで紹介しきれなかった既刊本も掲載しましたが、次号からは本号刊行以降の情報を中心とします。(編集委員会)

【書籍】

- 『農本主義のすすめ』 宇根豊・著  
ちくま新書 九五〇円 二〇一六年十月刊
- 『アナキスト民俗学——尊皇の官僚・柳田国男』 桂秀実、木藤亮太・著 筑摩選書 一九四四円 二〇一七年四月刊
- 『協同組合の源流と未来——相互扶助の精神を継ぐ』 日本農業新聞・編 岩波書店 二〇一七年六月刊
- 『狼煙を見よ——東アジア反日武装戦線』 狼 部隊』 松下竜一・著 河出書房



- 新社 二二七六円 二〇一七年八月刊
- 『パルチザン伝説』 桐山襲・著 河出書房新社 一九四四円 二〇一七年八月刊
- 『無銭経済宣言——お金を使わずに生きる方法』 マーク・ポイル・著 吉田奈緒子・訳 紀伊國屋書店 二一六〇円 二〇一七年八月刊

- 『実践 日々のアナキズム——世界に抗う土着の秩序の作り方』 ジェームズ・C・スコット・著、清水展・日下渉・中溝和弥・訳 岩波書店 三〇二四円 二〇一七年九月刊
- 『アメリカンドリーム の終わり——あるいは、富と権力を集中させる一〇の原理』 ノーム・チョムスキー・著、寺島隆吉・寺島美紀子・訳 デイスカヴァー・トゥエンティワン 一九四四円 二〇一七年十月刊



- 『「新しき村」の百年 〈愚者の園〉の真実』 前田速夫・著 新潮新書

- 八二二円 二〇一七年十一月刊
- 『何が私をこうさせたか——獄中手記』 金子文子・著 岩波文庫 一二九六円 二〇一七年十二月刊
- 『0円で生きる——小さくても豊かな経済の作り方』 鶴見済・著 新潮社 二〇一七年十二月刊

- 『大逆事件——死と生の群像』 田中伸尚・著 岩波現代文庫 一四四七円 二〇一八年二月刊
- 『囚われた若き僧 峯尾節堂——未決の大逆事件と現代』 田中伸尚・著 岩波書店 二二六八円 二〇一八年二月刊
- 『Lexicon 現代人類学』 奥野克己、石倉敏明・編 以文社 二四八四円 二〇一八年二月刊

【雑誌・ブックレットほか】

- 『冬の時代』 に抗って——戦争で生きる／する国の中で』 田中伸尚・著 日本キリスト改革派教会 中部中会 世と教会に関する委員会 二五〇円 二〇一七年七月刊 (集会の講演録。購入希望の方は同教会まで。TEL 076-1267-8113 または Fk042@spaceplan.ne.jp)

- 『ベトナム反戦直接行動委員会の時代』 (編集部によるKK氏へのインタビュー) 『支援連ニュース』 四〇七号

- 東アジア反日武装戦線への死刑重刑攻撃とたたかう支援連絡会議 二〇〇円 (模索舎での価格) 二〇一八年一月刊
- 堀部功夫「実事ありやなしや——宇田川文海に師事した頃の菅野須賀子(一)」 / 川口秀彦「編集者 矢牧一宏について」 『日本古書通信』 三月号』 日本古書通信社 七二〇円 二〇一八年三月刊
- 森まゆみ「風紋」の人びと 林聖子に聞く』 『東京人』 都市出版 九三〇円 二〇一八年四月(四月号から連載)

大逆事件関係書の出版相継ぐ

このところ大逆事件関係の図書の間行が相継いでいる。

二月十六日、田中伸尚氏の『大逆事件——死と生の群像』(岩波書店、二〇一〇年)が岩波現代文庫の一冊として出版された。前書は大逆事件百年にあたり刑死者、獄死者の遺族や関係者への取材を重ね、雑誌『世界』に「大逆事件——一〇〇年の道ゆき」として連載したものを一書としたもの。文庫版では「補記 一〇〇年以後 新たなステーション」の中で、金子武嗣弁護士を中心とする「再審請求検討会」の発足、全国各

地の市民団体が参集した「大逆事件の犠牲者たちの人権回復を求める全国連絡会議」（「大逆事件サミット」）の結成、そして和歌山や熊本、新潟などでの犠牲者の名誉回復と顕彰の動きを紹介し、「明治大逆事件で起訴された二六人」のプロフィール、遺族・墓碑などの一覧表を載せる。「大逆連鎖」を起こさない未来へ」と題する解説で法政大学総長の田中優子氏は、謀議とされただけで逮捕され、証拠をねつ造され、「逆徒」とレッテルを貼られて生まれ故郷で疎まれる存在になる…、共謀罪改め「テロ等準備罪が成立した時代にいる我々は、幸か不幸か大逆事件を身近に感じられる位置に立ったのである」と私たちに覚悟を促す。

田中伸尚氏は『大逆事件』文庫版と同時に『囚われた若き僧 峯尾節堂——未決の大逆事件と現代』を岩波書店より出版。峯尾節堂は臨済宗妙心寺派の僧侶だったが熊野で大逆事件に連座し、一九一九年三三歳で獄死した。これも粘り強い取材で節堂の痕跡を探った力作である。田中氏は二〇一六年十月、『飾らず、偽らず、欺かず——菅野須賀子と伊藤野枝』（岩波書店）を出版、併せて大逆事件三部作とした。

なお、峯尾節堂の生誕地新宮市では三月四日、田中伸尚氏を迎えて講演会が開かれ、百回忌の三月六日、墓の前に人権尊重を願う言葉が刻まれた石碑が建てられた。

三月十五日には眞田芳憲著『大逆事件』と禅僧内山愚童の抵抗』が佼成出版社より出版された。著者の眞田芳憲氏は中央大学名誉教授、長く世界宗教者平和会議日本委員会平和研究所所長を務めたが昨年十一月に急逝、本書が遺作となった。愚童が遺した著作や書簡から仏教徒としての実像に光を当て、その思想と行動を検証する。巻末に「内山愚童を偲ぶ会」の結成や顕彰碑の建立など今日に至る年譜を収録。

さらに、朴烈・金子文子の大逆事件に関して、昨年十二月、金子文子著『何が私をこうさせたか 獄中手記』が岩波文庫の一冊として刊行された。本書の出版は珍しくないが、立教大学名誉



教授で「関東大震災朝鮮人虐殺の国家責任を問う会」役員、評伝『金子文子——自己・天皇制国家・朝鮮人』（影書房、一九九六年）著者である山田昭次氏が解説を書き、金子文子年譜を収める。韓国では昨年、映画『朴烈 植民地からのアナキスト』（イ・ジュンイク監督）が大ヒットしたという。

（手塚登士雄）

### 〈第一回〉

## 古本屋オヤジの旧書紹介

川口秀彦

古本の市場（お客様向けの即売市でなく同業者のみ利用できるもの）には、実に様々なものが出品されています。その中で、自分の店に合いそうなものを選んで入札するのですが、必ず落札できるわけではありません。アナ系のものはかなり強い札を入れるのですが敗れることもしばしばです。そんなにして入手した（あるいは同業者に譲ってもらったり、お客様から売ってもらったりして入手した）本や資料の中から、これは！と思えるものを紹介するコラムにしてみたいと思っています。第一回は一通のハガキです。

昭和四十三年一月二八日中野局の消印のある七円の官製葉書、宛先の下半分は「**田無事件**」公判日程」と題して、新年のあいさつと傍聴への誘いの下に第四〇八回の公判日程がガリ刷りで印刷されています。裏を返すと「黒層社解散のお知らせ」の題字の下、「六七年十二月末をもって黒層社は解散することとなりました。」という簡単な報告と、運動を引き継ぐ三団体の連絡先（ベトナム反戦直接行動委員会⇨笹本気付、背叛社⇨和田気付、早大コンミュン⇨大島気付）が紹介されていて、こちらもガリ刷りです。背叛社の項には叛戦攻撃委員会（ALW）と学生アナキスト連盟（ALS）も併記されています。

この葉書が面白いのは、宛先が村上一郎になっていることです。一昨年から昨年にかけて数回、村上一郎の遺族が遺品整理をしたものが市場に出品されましたが、そのうちの一点です。笹本さんも、大島さんも、和田さんも、村上一郎と接点があったような人たちですから、村上一郎が「黒層社解散のお知らせ」の葉書の宛先になっていても不思議ではないのですが、アナキズム周辺ということからは、やや広がりすぎかなという気もしました。三島由

紀夫の後追いかとみられる自死を選んだ村上さんが、ベ反委の支持者であったということですから、最初に見た時は少し驚きました。差出人は、中野郵便局からということと、この頃の事務的な処理のことを考えて、笹本さんが村上さんを宛先の一人としていたのだと思います。数十通、あるいは百通前後出されたガリ刷りの葉書の一通が、私の手元があり、文献センターに収蔵されるというのも何かの縁だと思われまます。

**寄贈書紹介**

『伊藤野枝と代準介』の著者で、二〇一三年のカレンダー刊行イベント(本誌21、22号採録)でご講演いただいた福岡の矢野寛治さんから昨年末に刊行された新著を献本いただきました。

●『反戦映画からの声——あの時代に戻らないために』 弦書房 二〇五二円



**お知らせ**

**四月三十日にアナキスト・メーデー開催**

アナキスト・メーデー、ネグリを喰らえ! ——アウトノミア・労働・労働の拒否

日時・四月三十日(月曜日) 十三時半開場、十四時開始(十七頃まで)

場所・イレギュラー・リズム・アサイラム

問題提起・中村勝己(イタリア政治思想史)、栗原康(アナキズム研究)

主催・Against All Authority

連絡先・山谷労働者福祉会館、救援連絡センター

※投げ銭制、祝い酒あり

「やってきました、アナキストメーデー!」

はたらかねえぞ。コキつかわれてふ

みにじられて、ひとりて泣いた夜。アア、もううんざりだ。そんなあなたに、労働の拒否! スーパーで狩猟採集。都会のインディアンになれ。時給、一五〇万円要求。目的のないストライキをうて。うひよお、アナキー!

とまあ、そんなことをいつていた変なやつらがいなかったっけ? 一〇年前ブームになっていたアントニオ・ネグリ。かれが若いころ関わっていたイタリアのアウトノミア運動とかね。でもこのネグリ。いざひとが本気であればはじめと秩序をまもれとか、アナキーはいかんぞって、クソみたいなことをいうんだ。なんだろうか?

ということ、まずは勉強だ。ネグリふたたび。講師にきていただくのは、イタリア政治思想を研究している中村勝己さん。そもそもネグリって、イタリアじゃどう読まれてんの? そんなところからお話していただきます。

みんなあつまれ、アナキストメーデー。ネグリを喰らえ! そんなでもって、クソして寝やがれだア! (チラシより)

\*編集委員会注|| 刊行時点で終了している可能性がありますが、あえて掲載いたしました。

**映画『菊とギロチン』七月七日に公開決定**

鬼才・瀬々敬久監督が開東大震災直後の時代を描く最新作『菊とギロチン』の劇場公開が七月七日に決定。テアトル新宿ほか全国で順次公開されます。当センターも少しだけ資料協力をさせていただきます。

同作品はギロチン社ら若きアナキストたちが当時農村で人気だった「女相撲興行」の力士たちと出会っていたなから...という物語です。ぜひ劇場へ。



**静岡の墓前祭は 九月十五日に決定**

九月十五日(土)十一時〜 墓前祭(香谷霊園) 十四時〜 集会(あざれあ4階第2会議室)「伊藤野枝について語るう!」

「今回は講演スタイルではなく、大杉栄や伊藤野枝について参加者が語り合

うという形式で行います。」

大杉栄・伊藤野枝・橘宗一墓前祭実行委員会（十静岡女性史研究会・有志）

連絡先：053-422-0039

メール：koike200392@hotmail.com  
（小池善之）

## 文献センターだより

○12月17日 通信41号入稿。次号からの編集体制を考えると、ここ数年は好き勝手に？ほぼ二人で作っていた通信もこれで最後か。

○12月25日 文献センターで資料協力をした関係で、「菊とギロチン」完成試写会にお招きいただき。ギロチン社の面々と女性力士たちが自由を求めて戦う姿に感動。傑作。同じくギロチン社がモチーフの映画「シュトルム・ウント・ドランクツ」が2014年。わずか数年でギロチン社の映画が2本とは。こんな時代だからこそか。

○12月26日 新宿事務所にて通信の発送作業。3名。手を動かしながらの打ち合わせ兼ねて。総会で出た隔月刊行の話をも具体化させて行こうなど。

○2月3日 通信の隔月刊行に向けた初会合。7名。すぐすぐの隔月刊行は

現実的ではないので、今年は定期的に編集会議を開きつつ、現状のペースで体制を整えて行くことに。まずはメールンダリストを作成して、コアメンバー以外にも情報提供者として参加してもらう。次号の巻頭は1月に亡くなった戸田三三冬さんの追悼。

○2月14日 文献センター通信の編集新体制に向けたメールンダ・リスト網が開通。

○2月14日 ふもとの家の作業。前回1月6日に引きつづき立木の伐採と整理。増山・奥沢に山口守さんが加わり、古屋も合流。山口さんはナン十年ぶりの訪問とのこと。龍夫妻はインフル疑惑で娘の恭子さんが大阪から来て検査に付き添う。龍さんは感染、闘子さんは完治とのこと。お二人とも足が弱ってきた。

○2月25日 龍さんとの連絡がうまく取れなかったため富士宮書庫が見られなかったという三人組の方が我が家を訪問。文献センターの取り組みなどを紹介する。

○3月18日 第二回目の通信編集会議。わたしは上京できなかったためネット参加（すごい時代になったものだ）。この日は次号について、担当者に進捗確

認など。全国各地のインフォシヨップやグループの紹介、アナキズム図書室（アナキー・イン・ニッポン）など既存コンテンツの活用などのアイデアも出る。今回の編集会議は5月13日（日）。ご興味ある方はご連絡を。

○3月20-21日 八街訪問。寒い時節は敬遠とばかり足が遠のいていたが、資料運びと、若干の調べごともあり休日を利用して久々に出かける。庭がだいぶ荒れているので連休を利用して作業しなくてはならないか。今回も行きは山口（智）さんの手を煩わらせ、帰りは駅まで歩く。

○3月28日 このあたりから各担当から続々と原稿が届きはじめ、自分だけでなくとも原稿が集まりだす。新体制になったことを実感。

○3月31日 ふもとの家。この日は山口守さんの提案で友人と二人で自炊室のペランダを改修。その準備のため2日に寸法採りのために来て、資材はすでに届いていて、作業ぶりも手際よくペランダのぐらついていたり手すりや屋根を修理し、あわせて母屋入口の屋根、入口に手すりを設置、ポストの修理など要領よく進めて完了。増山・奥沢組は前回のつづきで主に切った枝でマキ

づくり。この日は龍さんも出てきて手伝ってくれた。

○4月7日 お花見。昨年の飛鳥山公園から場所を移して今年は四谷の土手。花はすでに散り終えて花びら一つない中、それでもあちこちにグループが思い思いに車座となっていた。幸い雨の予報がはずれてその一角に腰をおろして花よりお酒と料理とばかりに乾杯！風が冷たくなるとそうそうに地下の組合事務所に移って乾杯と歓談。来年もぜひやりましょう。参加14〜15名。

アナキズム文献センターでは、随時会員を募集中！ 入会ご希望の方は、左記住所まで郵送もしくはEメールにてお名前・ご住所をお送りください。

### アナキズム文献センター通信第42号

発行／2018年5月1日

発行所／アナキズム文献センター

編集／編集委員会

連絡先／東京都新宿区新宿

1-30-12 302

郵便振替口座／

00850-3-30010

口座名 A文献センター

Eメール／contact@cira-japana.net

定価／一部100円